

# 江戸の坂道散策

## 第6回 善光寺坂（文京区）



### 山野 勝 Yamano Masaru 坂道研究家

1943年、広島県生まれ。早稲田大学政経学部新聞学科卒業。報知新聞社を経て講談社に入社。「ヤングマガジン」編集長、第3編集局長、取締役、常務取締役を務め、現在講談社顧問。この数十年、東京の坂道を積極的に歩き、エッセイや講演などで坂道ブームの火付け役に、『タモリのTOKYO坂道美学入門』（講談社）に企画参加。著書に『江戸の坂 東京・歴史散歩ガイド』（朝日新聞社）がある。

文京区の小石川二丁目十七と小石川三丁目十七の間に「善光寺坂」という、美しく湾曲した名坂がある。坂の中腹に善光寺があるのが坂名の由来だ。この善光寺は江戸時代、坂上に位置する伝通院の塔頭（子院）の一つで縁受院と称していた。明治十七（一八八四）年に信州善光寺の分院となり、善光寺月参堂と改称した。

現在の道筋は善光寺前から一直線に下っているが、旧道は善光寺から北脇に直角に曲がりこみ、小石川三丁目十八と十九の間を東に下って新道と合流している。江戸時代には、坂下が徳川将軍家の菩提寺・伝通院の裏門にあたっていた。坂は古いが名前は新しいというわけだ。善光寺の朱塗りの山門と樹木の緑が見事に調和していて、再訪のたびに新たな感動を覚える。

坂上に、樹齢三百年ともいわれる棕の老木がある。北側の慈眼院に沢蔵司稲荷があり、その沢蔵司の魂がこの棕に宿っていると信じられている。沢蔵司は伝通院の学寮の修業僧だったが、実は千代田城の稲荷大明神の化身で、わずか三年で浄土宗の



慈眼院にある沢蔵司稲荷

奥義を極めたという。古川柳に「沢蔵司てんぷらそばがお気に入り」という句があるように、この僧は油揚げよりも蕎麦が大好物だったようだ。春日通りの「伝通院前」の信号近くに、「萬盛」という蕎麦の老舗がある。沢蔵司がこの店で蕎麦を食べたといわれ、代金の中に木の葉がまじっていたという。この伝えを守り、今でも毎朝、その日の最初の蕎麦を沢蔵司稲荷に奉納しているというから驚きた。

**茶屋 一眼**

港区南青山四丁目二十七と二十八の間に「姫下坂」という坂がある。青山霊園立山臺地の南西脇に位置する。別名を北坂という。坂上一帯は長者丸と呼ばれ、渋谷長者の屋敷があった。

この長者の娘が、白金村の白金長者の息子と恋に落ちた。娘は密会先の斧橋（西麻布四丁目一と三の間）へ行くために、ここで駕籠を下りて歩いていったという伝説から、姫下坂の名が生まれたという。

善光寺坂アクセス 丸ノ内線・南北線の後楽園駅下車。春日通りを茗荷谷駅方向に進み、伝通院前の信号で右折、伝通院門前を右折すると坂上。徒歩約10分。